

震災遺物と震災遺構の語り方
——ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展——

The Narrative of objects and places affected by the Great East Japan Earthquake:
At the Disaster Heritage Exhibition of the Preservation Project of the Fukushima
Disaster Heritage

矢田部 圭 介*

Keisuke YATABE*

要約: ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展では、震災遺産がふくしまの経験を語るとされる。このとき、じっさいにおきているのはどのようなことだろうか。ふくしまの経験を語りうる震災遺産とはどのようなもので、それは震災遺産展でどのようなにはたっているのか。そしてそれが語るのはどのような物語なのか。ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、東日本大震災が産み出したモノやバシヨのうち、特定の場所との結びつきが明らかで、その来歴を辿ることの可能なモノやバシヨを、震災遺物や震災遺構として保全の対象としてきた。そして、震災遺産展では、こうした震災遺物や震災遺構は、言葉と組み合わせられて、個別具体的なふくしまの経験を、物語として提示した。このとき、震災遺物や震災遺構は、この物語の構成要素でありつつ、それをうらづける証拠ともみなされる。また、震災遺産展で提示された個々の物語は、断絶のプロットにもとづく物語と捉えることができる。そして、この断絶の物語がはらむ震災以前と以後との非連続性は、震災遺構・震災遺物の痕跡としての性質によって裏づけられている。同時に、ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、震災以前と以後との連続性も強調され、それが震災遺構の場所性と震災遺物の物質性によって証しされる。こうしたふくしま震災遺産保全プロジェクトの実践は、阪神・淡路大震災の経験をふまえた問題提起への、東日本大震災の経験からの回答だとみなすことができる。

*武蔵大学社会学部教授

0 はじめに

ふくしま震災遺産保全プロジェクトは、東日本大震災で福島県に何が起きたのか（「ふくしまの経験」）を明らかにし、その共有・継承をはかるプロジェクトである（高橋 2021a: 5-6）。このプロジェクトは、ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会によって、文化庁の補助金をえて、2014年度から2016年度まで実施された¹⁾。実行委員会は、事務局の福島県立博物館と、浜通りのミュージアム7団体で構成された（高橋 2021b: 118）。

このふくしま震災遺産保全プロジェクトは、震災遺産の調査・保全事業と普及事業とを二本柱とし、前者を「土台」に、その成果を後者が「活用」するかたちで実施された（高橋 2021b: 118）。この活用の典型が震災遺産展であり、それは「震災遺産を展示し、それらが語る『ふくしまの経験』に耳を傾ける」場だとされる（「震災遺産を考えるⅢ 明治大学セッション」チラシ）。このように、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展は、震災遺産によって、ふくしまの経験が物語られる場として位置づけられている。

しかし、震災遺産が、東日本大震災で福島県に何が起きたのかを語るとは、どのようなことなのだろうか。もちろん震災遺産が「語る」とは、厳密には比喩のはずだ。では、このように言われるとき、実質的に起きているのは、どのようなことなのか。本稿の関心はここにある。

以下では、まず、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおいて、そもそもふくしまの経験を語りうる震災遺産とはどのようなものだとみなされているのかを確認する（第1章）。そのうえで、そうした震災遺産が、じっさいの展示会場で、どのように提示されはたらいっているかを検討する（第2章）。そして最後に、そこでは、ふくしまの経験がどのような物語として語られているのかみておきたい（第3章）。

1 震災遺産・震災遺物・震災遺構

まず本章では、ふくしま震災遺産保全プロジェクトのいう震災遺産とは何であるのか、確認しておこう。

1.1 震災遺産と博物館資料

ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、「震災遺産」は、「東日本大震災が産み出したモノやバショ」と「定義」されている（高橋 2019: 19）。このうち、モノについては「震災遺物」、バショについては「震災遺構」と呼び分けられる（高橋 2016: 2）。

ただし、ふくしま震災遺産保全プロジェクトは、東日本大震災が産み出したすべてのモノやバショを、そのまま保全²⁾しようとしているわけではない。ふくしま震災遺産保全プロジェクトで事務局を務めた福島県立博物館の学芸員の高橋満は、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの「立場」を、震災遺産の「保全」を「起点」として「象徴的な震災遺産を歴史資料そして博物館資料へ変換させること」だと述べる（高橋 2021a: 8）。ここには、博物館資料論にもとづいて、2つのことが含意されていると思われる。

第一は、資料への「変換」という記述から明らかなように、典型的な博物館資料論にもとづいて、震災遺産（東日本大震災が産み出したモノやバショ）もまた、保全されたうえで、調査・研究、保存・展示といった博物館資料化のプロセスを経て（水嶋 2012:114）、はじめてふくしまの経験を明らかにし伝えることができるとみなされている、ということだ。

第二は、すべての震災遺産が保全の対象になるわけではなく、そのうちで「象徴的な」震災遺産だけが、保全の対象になるということだ。典型的な博物館資料論では、保全されるべき資料は「選別評価」されなければならないとされる（水嶋 2012:121）。この評価されて選別された保全されるべき震災遺産が、ここでは「象徴的な震災遺産」と呼ばれているのだ。

1.2 象徴的な震災遺産と場所との結びつき

それでは、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにとって、保全されて博物館資料化の過程に組み込まれるべき象徴的な震災遺産とは、どのようなモノやバシヨのことだろうか。もちろん個々の震災遺産が保全されるべき理由はそれぞれ異なっているだろうし、実際にそれらが保全されるかは、それらを取りまく具体的な事情によって左右されるだろう。ここで確認したいのは、保全され博物館資料化の過程に組み込まれるべき震災遺産（震災遺物＋震災遺構）が最低限満たしていなければならない条件を、ふくしま震災遺産保全プロジェクトがどのように設定しているかである。

高橋は、プロジェクトの最初のフィールド調査で、瓦礫の山のなかから、「角部内」という「この辺りの地名」と「貝塚酒店」という「この付近に」多い姓を含む店名が記載された、壊れた徳利を震災遺物として収集した。高橋は、この理由を、この徳利が「角部内の記憶・経験・歴史性・集落が存在したことを唯一示す資料」であり「バシヨの記憶と経験を繋ぐ唯一のモノ」であるからだと述べ、それは「もし無銘であれば収集され得なかった」と語る（高橋 2016: 6）。ここでは、ある震災遺物（徳利）と特定の場所（角部内）との結びつきが明確であることが、そのモノが保全の対象になるかどうかの条件として示されている。

また、高橋は、震災遺構を「保存しなければならない理由と価値」をどこに見出すか、という問いに対して、すこし分かりにくい表現ではあるが、以下のように答えている。

筆者は、震災遺構であれば土地に根付くそのバシヨの価値の担保が後世に残していく普遍性に繋がっていくと考えている。（高橋 2019: 22）

ここでは、特定の震災遺構というバシヨが、それを含むより広い場所（土地）のなかで、どんな価値をもつのか——おそらくは、どんな役割をもち、

どんな意味をもつのか、とも言いかえられるだろう——を明示できることが、そのバショが保全の対象となるかどうかの条件として示されていると思われる。

このように、ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、震災遺物も震災遺構も、特定の場所との結びつきが明確であることが、保全され博物館資料化の過程に組み込まれるべき対象とみなされる条件となっている。こうした条件づけは、震災遺物・震災遺構という用語が由来する考古学の枠組みを参照すると理解しやすい。以下ではこの点を確認していこう。

1.3 考古学における遺跡・遺構・遺物

ふくしま震災遺産保全プロジェクトの立ち上げ時、当初提案されたのは「震災遺跡」という構想だったそうだ。これは、福島県立博物館の学芸員の高橋によって、考古学の遺跡・遺構・遺物という枠組みから発想されたものだった。これを原型として、なじみにくいとされた「遺跡」という用語の代わりに、福島県立博物館の学芸員の内山大介が提案した「遺産」という用語³⁾が実際には採用されたという（高橋 2021a: 6-7; 内山 2019: 114）。

こうして、当初の〈震災遺跡 = 震災遺構 + 震災遺物〉という枠組みの「遺跡」が「遺産」に入れ替えられ、〈震災遺産 = 震災遺構 + 震災遺物〉という枠組みとなった。このため、震災遺構・震災遺物という用語は、考古学由来の「震災遺跡」のもとでの位置をひきついでいる⁴⁾。では、考古学では、遺跡・遺構・遺物という枠組みは、どのように規定されているのだろうか。

考古学では、「遺跡」は「地球上に残る人間活動の痕跡」と規定される。「遺構」と「遺物」は、遺跡を構成する「主要な要素」とされ、人間活動の「不動産的」所産が「遺構」、 「動産的所産」が「遺物」と呼ばれる（田中 2002a: 20, 2002b: 34, 2002c: 47）。遺跡は、遺物や遺構がある「地点」であり（藤本 2000: 20-2）、特定の空間であり場所である。

不動産である遺構は、遺跡というより広い場所のなかにある、相対的に狭い場所のことである。つまり、遺跡と遺構は、「全体と部分」の関係にあり、「遺構は遺跡の部分をしている」(佐原 1995: 136)。もともと遺構という語は、遺跡の「全体と部分とをよびわける気運が高まり、建築史の用語を借りて」使われ始めたらしい(佐原 1995: 135-6)。このため、遺跡という場所は、その部分をなす各種の「遺構がどのように位置していたか」によって特徴づけられる。同時に、各々の遺構は、遺跡のなかの「その位置にあることに意味があり、その位置から切り離してしまったならば、肝心の属性のほとんどが失われてしまう」(藤本 2000: 138-9)。

動産である遺物は「遺構や遺跡の属性の分析に種々の基礎的なデータを与える」といわれる(藤本 2000: 142)。つまり、遺構や遺跡は、遺物のありようによって特徴づけられる。ただ、こうしたことが可能であるのは、遺物が、遺跡や遺構という場所のどこにどのように存在しているのかが明らかであるからである。遺物が、遺跡や遺構という場所と結びつかないとき、遺物はこうした役目を果たすことができない。こうして、例えば佐原は、遺物と場所の結びつきの重要性を、遺構という場所に着目して、「遺物あつての遺構、遺構あつての遺物」であり、「遺構との係わりが分からない遺物や、遺物を伴わない遺構の学術的価値はずっと低くなる」と述べる(佐原 1995: 140-41)。もちろん同様のことが、遺物と(遺構という場所を介しての)遺跡という場所との結びつきについてもいえるだろう。遺物は、遺跡や遺構という場所を特徴づけると同時に、それらの場所との関係によって意味をもつのである。

1.4 遺跡・遺構・遺物と震災遺産・震災遺構・震災遺物

前節でみたように、考古学においては、遺構という場所はそれを含むより広い場所である遺跡に位置づくことで意味をもち、遺物はそれを含む遺構や遺跡という場所との関係で意味をもつのであった。遺構は遺跡という場所の部分としてはじめて存在するのであり、遺跡や遺構という場所のな

かに位置づけられない遺物は価値が低い。

こうした考古学の基本的な発想を、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺構と震災遺物もまたひきついでいるとみるべきだろう。こうして、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおいては、保全されるべき震災遺構や震災遺物の最低限の条件が、それぞれの特定の場所との結びつきだともなされるのである。

このことは、震災遺産ではなく、震災遺跡という用語が採用されていれば、より明解だったであろう。しかし、震災「遺跡」が震災「遺産」に入れ替えられたことによって、みえにくくなってしまった⁵⁾。というのも、震災遺産という用語は、たんに震災遺構と震災遺物とをまとめて呼ぶときの名称にすぎず、震災遺跡という用語が持っていた震災遺構や震災遺物が存在する場所という意味を持たないからだ。このため、〈震災遺産＝震災遺構＋震災遺物〉という枠組みでは、震災遺構が位置づけられる先の場所が消えており、震災遺物を位置づける場所としては、震災遺構だけが残ることになった。この帰結として、さらに次のようなことがみえてくる。

第一は、このために、保全の対象となるべき震災遺構を条件づける際には、「土地に根付くそのバショの価値」という、前述のすこし分かりにくい表現が必要になったということだ（高橋 2019: 22）。〈震災遺産＝震災遺構＋震災遺物〉という枠組みには、震災遺構が位置づけられる〈土地＝遺跡〉という発想は組み込まれてはいない。しかし、保全されるべき震災遺構を条件づけるためには、震災遺構という場所を含むより広い場所への言及が必要だ。それゆえ、この表現では、「遺跡」のかわりに、「土地」という語が、アドホックに導入されているのだと思われる⁶⁾。

第二は、〈震災遺産＝震災遺構＋震災遺物〉という枠組みでは、震災遺跡と震災遺物との関係がみえなくなり、場所（遺跡・遺構）と遺物との関係が、震災遺構と震災遺物の関係に集約されるということだ。もともと遺物は、遺構に位置づけられることによって遺跡に位置づくという性格がよく、直接的には、遺跡との関係よりも、遺構との関係が注目されやすかつ

た——「遺物あつての遺構, 遺構あつての遺物」(佐原 1995: 140-1)。これが、遺跡という場所が消えた〈震災遺産 = 震災遺構 + 震災遺物〉という枠組みでは、さらに促進される。この枠組みでは、震災遺構と震災遺物の間の相互規定的な一体の関係がより強調され、例えば、震災遺物の価値が「バシヨの記憶と経験を繋ぐ唯一のモノ」と、震災遺構を指す「バシヨ」という表記を用いて表現されることとなる(高橋 2016: 6)。〈震災遺産 = 震災遺構 + 震災遺物〉という枠組みのなかでは、震災遺物は、主として震災遺構という場所に結びつけられるのだ。

1.5 震災遺物・震災遺構と来歴

さて、特定の場所との結びつきが明らかであるということは、震災遺物や震災遺構にとって何を意味するだろうか。

「富岡町災害対策本部」に残されたファックス用紙からは、それが対策本部の置かれた文化交流センターの備品であり、対策本部で連絡に用いられていたという経緯が明らかだ。「角部内」「貝塚酒店」と記載がある壊れた徳利には、それがどこで誰によって作られどこでどのように用いられていたのかを辿る可能性が開かれる。震災遺物にとって、特定の場所とのつながりが明らかであるということは、そのモノの、いわゆる来歴を辿ることができる(手がかりがある)ということにほかならない。

同様のことは、震災遺構についてもいえるだろう。前述のように、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおける保全すべき価値ある震災遺構とは、「土地に根付くそのバシヨの価値」が担保されている場所だとされた(高橋 2019: 22)。これはたんに、震災遺構が、それをふくむ土地に、緯度・経度上のひとつの地点として、マッピングできるということではない。「土地に根付くそのバシヨの価値」が明らかであるためには、そのバシヨで何が起こってきたのが明らかでなければならない。そのバシヨで、何がどんなことを引き起こし、だれがどのように活動してきたのが知られることで、はじめてその「バシヨの価値」は明らかになる。震災遺構にとって「土

地に根付くそのパシヨの価値」が明らかなためには、そのパシヨの来歴が明らかである必要があるのだ。

こうして、震災遺物や震災遺構と特定の場所との結びつきが明らかであるというのは、実質的には、それらの来歴を辿ることができる（手がかりがある）、ということになるだろう。

ただし、ここでいう震災遺物や震災遺構の来歴とは、なんらかのかたちで東日本大震災に関わる、なんらかの程度で個別具体的な来歴のことだ。例えば、後述のミチ美容室の看板時計という震災遺物でいえば、ここで問題になっているのは、東日本大震災に関わるこの看板時計の来歴であり、ナショナル社におけるこの看板時計の開発歴という東日本大震災とは無縁の来歴ではない。また、ここで問題になっているのは、たんに東日本大震災を経たという一般的な来歴ではなく——こうした一般的な来歴が明らかであるということは、ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは保全の対象とはされないあらゆるガレキにも当てはまる——、ミチ美容室の看板時計が、東日本大震災以前には、どこでだれにどのように用いられていたのか、どんな経緯でこのような姿になり、いまに至るのかという個別的で具体的な来歴である。

それでは、このような東日本大震災に関わる個別具体的な来歴を辿ることができる震災遺構や震災遺物は、震災遺産展において、どのようにはたらいっているのだろうか。

2 震災遺産展のなかの震災遺物・震災遺構

ふくしま震災遺産保全プロジェクトは、アウトリーチ事業の一環として多くの会場で震災遺産の展示を行ってきた。このうち、本章では、プロジェクトの最終年度終盤の2017年1～2月に、「我^が曆→ガレキ→我^の歴」というタイトルで、東京駿河台の明治大学博物館の特別展示室で開催された震災遺産展⁷⁾を検討の対象とする。「我^が曆→ガレキ→我^の歴」展では、ふくしま

の経験は、どのように示されているであろうか。そして、前章でみたような震災遺産は、それをどのように支えているのだろうか。

2.1 震災遺構にあった震災遺物／震災遺物のあった震災遺構

「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展の会場を見回して、まず目にとまるのは、多種多様なモノとしての震災遺物である。例えば、「ミチ美容室」と名前の入った、昭和レトロな懐かしく可愛い看板時計が、しかし2時50分の手前で針が止まり、ひびが入って汚れてしまった姿で、展示台の上に置かれている。

展示されているのは、こうしたモノだけではない。震災遺物が置かれた付近の壁面には、多くの場合、写真パネルがかけられている。例えば、上述の「ミチ美容室」の看板時計のすぐ上の壁面には、収集時の状況を撮った写真パネルがかけられている。そこには、同じく「ミチ美容室」と名前の入った庇が破れ、壁のタイルがはげた店頭の、ガラスが割れた窓枠に、この看板時計が設置箇所からもぎとられてはまり込んでいる様子が写っている。このような震災遺物と写真パネルの組み合わせは、「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展における展示の基本単位だと言ってよいだろう。

この震災遺物と組みあわせられた写真パネルの画像は、基本的に、その震災遺物が収集された場所、つまり震災遺構の状況を示している⁸⁾。もちろん、震災遺構それ自体を会場に持ち込むことはできない⁹⁾。その代わりに「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展では、写真パネルによって、震災遺構が、会場でいわば仮構されているわけである。

このように「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展では、震災遺物と震災遺構が組み合わせられて展示されている。そこで展示されているのは、いわば、震災遺構にあった震災遺物／震災遺物のあった震災遺構である。もちろんこうした展示のあり方は、1.4で論じたような、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおける、震災遺物と震災遺構の一体性を背景としているといえるだろう。

2.2 言葉

アライダ・アスマンは、ある場所が放棄され破壊されてしまったとしても、そのような場所は、残された物とともに、「新たな文化的記憶の標点」となりうるという。ただし、アスマンは、そのためには、それらは「説明されなければならない」と指摘する。破壊されたバショ（遺構）と残されたモノ（遺物）は、そのままでは、何も意味しない。それらの意味は「言葉による伝承によって確かなものにされなければならない」。つまり、それらは「物語の要素」にならなければならないのだ（Assmann [1999] 2006=2007: 368）。

「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展においては、この言葉による説明は、カードなどに記載されたキャプションのかたちをとる。例えば前出のミチ美容室の展示では、展示台の看板時計の横に置かれたカードに「『ミチ美容室』看板時計 富岡町 JR 富岡駅前商店街所在の店先にあったもの。地震発生直後の停電で止まり、その後津波を被った」と記載されている。また、別途カードは用意されていないが、写真パネルの右下には「『ミチ美容室』双葉郡富岡町仏浜釜田 平成 26 年 6 月 4 日撮影」との記載がみられる。震災遺物の現物や仮構された震災遺構には、多くの場合このような言葉による説明が伴い、これも「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展における展示の基本的な構成要素をなしている。

さて、こうした言葉による説明によって、観覧者は、ミチ美容室にあった看板時計／看板時計のあったミチ美容室が、どんな経緯で壊れてしまったかを知ることになる。だとすれば、言葉による説明は、震災遺構にあった震災遺物／震災遺物のあった震災遺構が、何であり、どこであり、どのような経緯で、目の前にあるような状態になったのかを、つまりはその来歴を示していることになる。展示における言葉による説明が、展示されている対象の来歴についての説明であるのは、なにも特別に珍しいことではない。これは、歴史系の展示においては、ごくふつうにみられる形態だろう。「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展のほかの展示においても、多くの展示で、こう

した言葉による説明をみることができる。

ただ、ここであらためて確認しておきたいのは、言葉による説明が展示品の来歴を示すことができる条件についてである。それは、その展示品の来歴が辿れなければならない、ということだ。当然ながら、来歴を辿れないモノやバショについて、その来歴を説明することはできない。「我^が曆→ガレキ→我^き歴」展で展示されている、震災遺構にあった震災遺物／震災遺物のあった震災遺構について、その来歴があたりまえのように記載されているなら、それは、そこには来歴を辿りうるモノとバショしか存在しないということだ。

すでに1.5でみたとおり、このことは、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおいては必然である。ふくしま震災遺産保全プロジェクトが保全の対象とした震災遺物や震災遺構の条件は、それが特定の場所と結びついており、それゆえ実質的にその来歴を辿りうるということだった。つまり震災遺産展にあるのは、すべてこうした方針の下で保全された震災遺物と震災遺構なのである¹⁰⁾。

2.3 震災遺物・震災遺構の過少と過剰

このように「我^が曆→ガレキ→我^き歴」展の言葉による説明が、震災遺物や震災遺構の来歴についてだととして、モノとしての震災遺物やバショとしての震災遺構が、それらの来歴についての説明と、どのように関係しているのか、本節では、もう少しふみこんで検討しておこう。というのも、来歴の説明にとって、おそらく、震災遺物というモノや震災遺構というバショは、つねに過少であり過剰であるように思われるのだ。

過少だというのは、震災遺物も震災遺構も、それ自体では、来歴を示すことはできないからだ。看板時計は、「ミチ美容室」と記載があるのでミチ美容室のものだったろうし、汚れているしひびが入っているし止まっているのだから壊れてしまったのだろう。写真パネルのミチ美容室も、庇が破れタイルがはげた店頭の、ガラスが割れた窓枠にこの看板時計がはまり

込んでいるのだから、きっと壊れてしまったのだろう。モノやバシヨは、例えばここまでは示すことができる。しかし、どのような経緯でこんなことになってしまったのかを示すことはできない。そのための言葉が震災遺物や震災遺構には欠けているのである。

しかし、震災遺物や震災遺構は、それがモノやバシヨであるかぎり、つねにその来歴として説明される以上の何かであるという意味で、来歴の説明に対して過剰でもある。「我^が曆→ガ^レキ→我^き歴」展における来歴の説明は、そのモノを「ナショナル製電気時計」ではなく、「『ミチ美容室』看板時計」と記載した。しかし、そのモノはうそいつわりなく「ナショナル製電気時計」でもあり、もし「ナショナル製電気時計」と名づけられるならば、その来歴の説明は、この型の看板時計がナショナルというメーカーでどういう経緯で開発され販売されたのかを示すことになるだろう。モノやバシヨに対して辿りうる来歴とその説明はひとつとおりではない。ひとつの来歴とその説明に対して、モノやバシヨは、潜在的には、つねにそれに還元しきれない何かでありうる。

言葉による説明に対する、震災遺物や震災遺構のこうした過少さや過剰さは、一方では、観覧者による展示の読み解きの多様性の原資となるだろう。

他方で、こうした過少で過剰なモノやバシヨとしての震災遺物や震災遺構を、言葉による来歴の説明が、補足し限定することで¹¹⁾、それらは、言葉による来歴の説明では明示されない情報を示し、言葉による来歴の説明を肉づける。例えば「JR 富岡駅前商店街所在の店先にあったもの」という看板時計についての説明を受けて、観覧者は、昭和レトロな看板時計と店舗の外観から、ミチ美容室の富岡駅前商店街での長い年月を想像する。そして「地震発生直後の停電で止まり、その後津波を被った」という説明を受けて、看板時計が指しているのが震災発生の時刻であることに気づき、写真パネルから店舗の外壁のタイルを剥がして庇を壊し窓を割って看板時計をもぎ取るほどの津波の威力に気づく。

このとき、モノとバシヨは、言葉による来歴の説明とともに、ひとつの物語を構成し、それによってその物語に組み込まれる。こうして震災遺物と震災遺構は、「物語の要素」となる (Assmann [1999] 2006=2007: 368)。

さらに、いったん震災遺物と震災遺構が物語に組み込まれ、物語をその内側から構成するようになると、それらは、同時に、その物語をうらづける証拠のようにはたらきはじめる。つまり、看板時計と写真パネルの画像は、「JR 富岡駅前商店街所在」の「ミチ美容室」が、東日本大震災で地震と津波に襲われた証拠として、観覧者によって捉えられる。来歴についての言葉とともに、物語に組み込まれてその要素となった震災遺物と震災遺構は、それらが構成している物語をうらづけ、その物語の真正性を保証しているかのようにふるまうのである。

3 断絶の物語と震災遺物・震災遺構

こうして『『ミチ美容室』の看板時計』と題された展示のモノとバシヨと言葉の組合せから、私たちは、例えば次のような物語を受け取ることができるだろう。“JR 富岡駅前商店街でミチ美容室は、看板時計とともに、長年、営まれてきた。しかし街に馴染んだその看板時計は、地震で時を止め、津波でもぎ取られて、破壊された店先にめり込むようにして残された”。

これが、ひとつの「ふくしまの経験」の物語である。「我^が曆^れ→ガ^レキ→我^き歴」展における個々の展示は、各々、このような個別で固有のふくしまの経験の物語を提示している。個々の展示が提示しているのは、それぞれ異なった物語、それゆえそれぞれ異なったふくしまの経験である。だから、「我^が曆^れ→ガ^レキ→我^き歴」展では、多種多様な異なったふくしまの経験が物語られているということが出来るだろう。

他方で、「我^が曆^れ→ガ^レキ→我^き歴」展における、これらの個別の物語には、共通する骨組みのようなものをみてとることもできる。本章ではこの骨組みに着目して、震災遺物や震災遺構によって「我^が曆^れ→ガ^レキ→我^き歴」展で

語られる「ふくしまの経験」について検討しておこう。

3.1 東日本大震災以前の状態から以後の状態への移行

島村によれば、物語とは、「ある『筋』によってまとめられるような、統一性を持った言説」のことだ。ここでいわれる「筋」とは、「時間的順序にしたがって配列された出来事の継起」のことを指すストーリーと、それらの出来事の「因果関係」に重点がおかれたプロットとに区別される。つまり、ストーリーとは出来事を起きた順に並べたという意味での筋であり、言説の筋が、そうした出来事の継起がどんな因果で生じたのかを示す場合にはプロットと呼ばれるわけだ。このように因果関係に焦点されるため、(いわば年譜における事項の羅列のようなストーリーに対して)プロットには「発端・展開・結末という一つの流れ」がみられるという。島村は、それを「ある状態から別の状態への移行」のことであり、「もっとも抽象的なレベルでとらえた際の〈物語の論理〉」だと指摘する（島村 1991: 84-5）。

例えば、前出の『『ミチ美容室』の看板時計』の展示が示す物語から「ある状態から別の状態への移行」とその因果に着目して、プロットとしてのこの物語の筋を、単純化してとりだしてみれば次のようになるだろう。

- (1) JR 富岡駅前商店街でミチ美容室は、看板時計とともに、長年、営まれてきた（ある状態）。
- (2) しかし東日本大震災で地震と津波にあって（原因）、
- (3) その看板時計が、地震で止まり津波でもぎ取られ、破壊された店先に残された（別の状態）。

ここでは、「ある状態から別の状態への移行」とは、東日本大震災発生以前の状態から、東日本大震災発生以後の状態への移行のことであり、この移行を引き起こした原因として東日本大震災が位置づけられる。

「我^が曆[→]ガレキ[→]我^き歴」展のすべての展示について、本節で、ひとつずつ検証することはできない。ただ、こうした、東日本大震災以前の状態から、東日本大震災によって、東日本大震災以降の状態がもたらされた、というプロットが、本展の多くの展示が示す物語に共有される基本構造だといってよいように思われる。

というのも、「我^が曆[→]ガレキ[→]我^き歴」展でのふくしまの経験は、東日本大震災で「福島県で何が起きたのか？」という問い（ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会 2017: 1）への回答として示されているからだ。私たちが、あえて「何が起きたのか」と問うときには、それが起きなければなかったであろう、起こる前とは異なった起こった後が暗黙に前提されている。そして、この問いへの回答は、それによってこの以前とは異なった以後が引き起こされたという形式で示されるのが常だろう。つまり東日本大震災で「福島県で何が起きたのか？」という問いは、震災によって震災以前とは異なった震災以後が生じた、という回答の形式を指定しているのである。

3.2 断絶の物語と不連続性

重要なのは、この震災以前から以後への移行の特徴づけである。ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、これは、次のように述べられる。

本来あるべきだった生活への回復力が機能せず、別な局面を受け入れざるを得ない日常、このような非日常の出現と継続そして定着が福島県の現状となっている。（高橋 2021a: 5）

ここでは、震災以前の状態から、以後の状態への移行とは、震災以前の日常にとっての「非日常」ともいうべき状態が、つまり震災以前の生活からすれば「本来あるべき」ではない生活が、日常化してしまうことだと述べられる。この以前と以後は、以前からは想像すらできない以後という、

以前と以後のそのあまりにも大きな落差によって特徴づけられている。

このあまりにも落差の大きい以前から以後への移行は、「我曆^が→ガレキ^れ→我^き歴」展のなかでは、「断絶」¹²⁾と呼ばれる。本稿では、この語を借りて、「我曆^が→ガレキ^れ→我^き歴」展の各々の展示の物語に通底するプロットを、断絶のプロットと呼んでおこう。それは、東日本大震災以前の状態が、東日本大震災によって断絶し、以前とは大きく異なる東日本大震災以後の状態へと移行した、というプロットのことである。そして、このプロットにもとづく物語のことを、断絶の物語と呼んでおくことにしたい¹³⁾。

さて、この震災以前の状態と以後の状態との大きな落差によって特徴づけられる断絶のプロットにもとづく物語は、まずは以前と以後との不連続性を示す物語だといえる。2.3で、震災遺物や震災遺構は、展示の物語を構成するとともに、証拠づけるとみなされると述べた。だとするなら、震災遺物や震災遺構が証すのは、まずはこの以前と以後との不連続性だといえるだろう。

この不連続性の証しは、モノやバショがまさに「遺物」や「遺構」であると捉えられることによって、つまりそのモノやバショがかつてあった「人間活動」の「痕跡」である（田中 2002b: 34）と捉えられることで可能になる。

震災遺構の場合は、このことが分かりやすいだろう。遺構が、人間の活動の痕跡であるというのは、そこではかつてのような人間活動がもう行われていない、ということだ。そして、そのバショを、もうそうした活動が行われていない場所とみなすことは、その場所を、かつてはそうした活動が行われていた場所とみなすことと同じことである。ミチ美容室の破壊された店舗の写真は、かつてそこに髪を切るために街の人々が集まっていたことと、もうそこには髪を切るために街の人々が集まってくることがないことを、ひとしく示している。こうして、震災遺構は、まさに遺構として捉えられることによって、ある活動が行われていた以前の状態と、そうした活動が行われていない以後の状態との落差の存在を、その意味での不連続性を証しているようにみえる。

震災遺物の場合、それが人間の活動の痕跡であるというのは、もう使われていない、あるいはもう使えないモノ、つまり廃棄物だとみなされるということだ。この看板時計は、汚れてひびが入って針が止まって、いま目の前の展示台の上にある。これは、展示台でなければ、粗大ゴミ置き場にあるはずだ。このとき、私たちはモノを、壊れてしまった、とみなしている。けっしてはじめからこのようだったとは思わない。つまり、あるモノを、廃棄物だとみなすことは、それが、かつては、動いていて、使われていたのだとみなすことと同じことなのだ。それは、かつてそれが組み込まれていた人間の活動を示唆するのである。

震災遺物は、まさに遺物として、廃棄物として捉えられることによって、もう使えないものとしてみなされることによって、かつて使われていたということといま使われていないということとをひとしく指し示す。こうして、そのモノは、それが使われていた以前の状態とそれが使われていない以後の状態の落差の存在を、その意味での不連続性を、証しているようにみえる。

3.3 断絶の物語と連続性

さて、そもそも「我^が曆→ガレキ→我^き歴」という震災遺産展の奇妙なタイトルは何を意味しているのだろうか。高橋は、瓦礫はもともと「個人の記録や生活の道具」であったもので、その意味で「日々の生活の痕跡」だと指摘し、これを「我^が曆」と呼ぶ。しかしこれは「ガレキ」として「片付け・処分」の対象になってしまう（我^が曆→ガレキ）。ただし、これを震災遺産として保全することで、そこから「我々の歴史を抽出」することができる。こうした「歴史性を帯びた存在」が「我^き歴」と呼ばれる（我^が曆（→ガレキ）→我^き歴）（高橋 2015: 28）。つまり「我^が曆→ガレキ→我^き歴」が意味しているのは、日々の生活の痕跡であるモノやバショを、処分の対象とするのではなく、博物館資料化の過程に組み込み歴史資料とすることである。ここで重要なのは、この歴史資料から抽出した「我々の歴史」によって、「震災

以前と以後が不可分であることを示すこと」ができるとされている点である（高橋 2015: 28）。

このように「我曆→ガレキ→我歴」という震災遺産展のタイトルは、前節でみたような不連続性の存在にもかかわらず、東日本大震災の以前と以後とは不可分に連続しており、しかもこの連続性は資料化された震災遺産によって保証されることを含意しているのである。それでは、「我曆→ガレキ→我歴」展において、震災遺構や震災遺物は、断絶の物語に通底するこの連続性をどのように証すのだろうか。

おそらくそれは、バショやモノがそこに在りつづけている、ということに依拠しているように思われる。

たしかに写真パネルのミチ美容室のあった場所にはもう髪を切りに人々は集まらない。しかし、人々が髪を切りに集まっていたのも、もはや集まることがなくなってしまったのも、そこである。そこで起きていることは変わったけれど、そのバショはそこに在り続けている。こうした場所性ゆえに、震災遺構は以前と以後がひとつつながりの経過であることを、つまりその連続性を証しているようにみえる。

同様に震災遺物は目の前にモノとしてある。かつては使われていたが、いまは使われていないのは、この看板時計である。そのようにみなされる時、このモノは、その物質性によって、それが存在し続けていることを示すことになる。この看板時計は、以前と以後の落差のなかを、モノとして存在し続けてきたことを示すことで、以前と以後がひとつつながりの経過であることを、つまり、その連続性を証しているようにみえる。

このように、バショとしての震災遺構とモノとしての震災遺物は、その場所性や物質性によって、それらが以前の状態と以後の状態を貫いて存在し続けているとみなされることによって、以前と以後との連続性を示しているようにみえるのだ¹⁴⁾。

4 おわりに

ここまで、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおける震災遺産と震災遺産展についての検討をとおして、次のことを明らかにしてきた。ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、東日本大震災が産み出したモノやバシヨのうち、特定の場所との結びつきが明らかであり、その来歴を辿ることの可能なモノやバシヨを、震災遺物や震災遺構として保全の対象としてきた。そして、震災遺産展では、こうした震災遺物の実物と仮構された震災遺構とこれらの来歴についての言葉による説明とを組みあわせることで、個別具体的なふくしまの経験が、各々ひとまとまりの物語として提示された。このとき震災遺物や震災遺構は、この物語の構成要素でありつつ、それをうらづける証拠ともみなされた。また震災遺産展で提示された個々の物語は、断絶のプロットにもとづく物語と捉えることができた。そして、この断絶の物語がはらむ震災以前と以後との非連続性は震災遺構・震災遺物の痕跡性によって証されるとみなされた。同時に、震災以前と以後との連続性も強調され、それが震災遺構の場所性と震災遺物の物質性によって証されるとみなされた。

こうして、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展は、震災以前と以後とが、大きな落差をはらみながらも不可分に連続していることを、震災遺産によって保証する場だと言えるだろう。最後に、こうした位置づけの背景について一言ふれておこう。

阪神・淡路大震災後、歴史資料の保全に奔走し、歴史資料ネットワークの設立に関わった奥村弘は、その経験をふまえて「地域の歴史の中で大災害を捉えること」の重要性を指摘している。奥村によれば、被災者の「生活再建はその歴史的な現在の上にはかない」にもかかわらず、「そのような視点は阪神・淡路大震災時にはほとんど顧みられることがなかった」という(奥村 2012: 10)。というのも、大きな災害が起こった場合、それによって「基本的なインフラが破壊された時点ゼロとして、そこから『復興』

を描くという歴史意識」が頑として存在しているからだ。奥村は、これに対して、その地域に伝わる被災した歴史資料（被災歴史資料）と、大災害そのもの伝える災害資料をとおして、「災害後の歴史と、災害前の歴史を統一的にとらえること」の重要性を強調する（奥村 2014: 206-7）。奥村によれば、被災歴史資料については、これを「地域歴史遺産」と位置づけて保全し、災害以前と以後の地域を統一的に把握するための方法論は蓄積されつつあるという。他方で、災害資料をとおして、これを行うための「方法論は未開拓であり、具体的な歴史像提示もほとんど行われていない」という（奥村 2012: 68）。

こうした奥村の問題提起をふまえれば、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展を、災害資料（＝震災遺産）をとおして、ふくしまの「災害後の歴史と、災害前の歴史を統一的にとらえ」た「具体的な歴史像」を提示する試みと位置づけることができるだろう。東日本大震災の以前と以後を、その落差にもかかわらず一続きに捉えるふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展は、阪神・淡路大震災の経験からの呼びかけに対する、東日本大震災の経験からの回答でもあったのだ¹⁵⁾。

[註]

- (1) 2016年度いっぱい、ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会は活動を終了し解散した。ただし、2017年度からは、福島県立博物館単独の館内のプロジェクトとして、ふくしま震災遺産保全プロジェクトは継続して進められている（内山 2021: 124）。本稿では実行委員会形式で実施された2016年度までのふくしま震災遺産保全プロジェクトを検討対象とする。
- (2) 管見のかぎりでは、「保全」という語は、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおいて明確に規定されていないように思われる。本稿では、ふくしま震災遺産保全プロジェクトにおける「保全」とは、震災遺産が、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの一定の管理の下におかれることを意味すると理解しておきたい。このため、震災遺物の「収集」もまた保全の一形態であるとみなしておく。
- (3) 内山は、「震災遺産」という用語は、震災に関わるあらゆる資料を含んだ「広

い対象をとらえる」ことができる述べ。また「遺産」という語に、震災を後世に伝えるためにそれを「守り伝え」「未来に継承」してほしいという「願望」を込めたとも述べている(内山 2019: 114-5)。

- (4) 例えば、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの活動に関する高橋の論考のなかでは、震災遺構と震災遺物の関係を説明するために、考古学の遺構・遺物という枠組みが用いられている(高橋 2019: 21)。あるいは、ふくしま震災遺産保全プロジェクトの活動をまとめた冊子のなかでも、震災遺構と震災遺物が、考古学の遺跡(遺構+遺物)と関連づけられて説明されている(高橋 2021a: 8)。
- (5) 震災遺構が関係づけられる「土地」は、震災をはさんで、いまも人々がさまざまな仕方がかかわっている空間である。それを「遺跡」つまりは「人間活動の痕跡」と呼んでしまうことには強い抵抗があるだろう。そう考えれば「遺跡」の語が避けられたことそれ自体には、納得がいく。
- (6) ただし、この〈土地=遺跡〉に対応するような発想が、実際に、ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは消失しているとまでいうのは早計だろう。「被災地」という用語や「ふくしま」「浜通り」「富岡町」などさまざまな水準での土地の固有名詞が、その都度、必要に応じて、多様な遺構を包含する広域を示す役を、事実上果たしているように思われる。
- (7) 会期は 2017 年 1 月 8 日から 2 月 5 日。この震災遺産展は、明治大学を会場として「震災遺産とふくしまの経験」というテーマで実施されたアウトリーチ事業「震災遺産を考えるⅢ 明治大学セッション」の一環として開催された(ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会 2017: 19-20)。筆者は、2017 年 1 月 31 日および 2 月 4 日に観覧した。以下の記述はこの時の記録にもとづく。
- (8) ただし、こうした震災遺構のほとんどは、じっさいには、写真パネルどおりには保全されていない。上述のような「ミチ美容室」の様子が残っているのも、写真パネルのなかだけである。
- (9) 「我曆→ガレキ→我歴」展でみられた、より直接的な震災遺構の展示として、会期中に数回限定的に開催された「MR 3D デジタルアーカイブ体験展示」について、特筆しておくべきだろう。これは、東北大学総合学術博物館によって提供された、一種の体験型展示であり、観覧者は、各地の震災遺構のレーザー測量をもとにした 3 次元デジタルアーカイブを、MR (Mixed Reality 複合現実感) システムをとおして体験するものである。会場の一角の専用のスペースで、観覧者は、インストラクターの指示のもとで、ヘッドマウントディスプレイを使用して、「あたかもその場に行ったかのような臨場感」で震災遺構「に行く体験」をする(東北大学総合学術博物館 2017)。ただし、少なくとも「我曆→ガレキ→我歴」展では、この体験展示が、「我曆→ガレキ→我歴」展

のほかの展示と有機的な連結をもってはいなかったように思われる。

- (10) 本節の記述は、ごくあたりまえの、わざわざ指摘する必要のないことのようにみえるかもしれない。しかし、被災したモノやバショにとって、来歴を辿りうるというのは、必ずしも当然のことではない。被災した多くのモノは由来が分からないまま瓦礫として処分され、被災したバショはしばしば更地にされその過去から切りはなされる。来歴を辿りうるモノやバショだけを保全し展示するということは、被災したモノやバショのごく一部を保全し展示することである。このことは、東日本大震災の被災物の収集に関してふくしま震災遺産保全プロジェクトと並び称されるリアス・アーク美術館が、被災物をその来歴ではなく創作物語とひもづけて展示していることを思い出せば、よりはっきりと理解できるだろう（リアス・アーク美術館「東日本大震災の記録と津波の災害史」展パンフレット）。被災したモノやバショは、つねに来歴とひもづいているとはかぎらない。むしろ来歴と切りはなされてしまうことが、被災の苛酷な帰結のひとつではないだろうか。
- (11) ここでは、言葉による説明とモノやバショとの関係に焦点してこのように述べたが、もちろん補足したり限定したりするにはたらくのは、言葉による説明にかぎらないだろう。例えば震災遺産展というこの状況は、このモノとバショが震災によって生じたことを補足するし、このモノがレトロな電気時計の見本ではなく、震災遺産であると限定するだろう。モノやバショは、つねに何重もの補足し限定するはたらきの重なりの中にある。こうしたいくつものはたらきの重なりを一挙に開示することはできないだろう。
- (12) 「我^が曆[→]ガレキ[→]我^き歴」展は、4つのパートで構成されており、「断絶」という語は、この内の3番目のパートの名称「断絶する『日常』」で用いられている。各々のパートの名称と内容の概略は以下のとおりである。第一の「1. あの日あの時から」のパートでは、地震で落下した学校体育館の照明、津波の痕跡が残る介護施設の壁紙、火災で溶けた街灯など、地震と津波の規模の大きさと被害の甚大さを示すさまざまな震災遺産が展示されている。第二パート「2. 『避難』の多様性」は、津波に続けて起こった原発事故のため、短期間しか使われなかった避難所にかかわる震災遺産を中心に構成され、避難の諸相が示されている。第三の「3. 断絶する『日常』」のパートでは、浪江町の新聞店と県立富岡高校にかかわる震災遺産によって、それまでの生活が途切れたことが示される。第四の「4. 思いがけない『未来』」のパートでは、避難所となった旧相馬女子校校舎で開設された特設学級にかかわる資料などによって、まったく想定されていなかった生活がはじまってしまったことが示される。

これらの各パートが組みあわさることで、「我^が曆[→]ガレキ[→]我^き歴」展全体で、

〈震災以前→震災→震災以後〉というプロットが提示されているように思われる。こうした観点からすれば、これらの各パートは、〈震災以前→震災→震災以後〉というプロットの、どの部分に焦点しているかによって分かれているといえそうだ。「1. あの日あの時から」は〈震災〉自体に、「3. 断絶する『日常』」は〈震災以前→震災〉という部分に焦点した展示だといえそうだ。また、「2. 『避難』の多様性」と「4. 思いがけない『未来』」は、いずれも〈震災→震災以後〉に焦点した展示だが、前者は震災直後の避難という事態に、後者は震災後、数ヶ月から数年間の変化に、それぞれ焦点しており〈震災以後〉の幅が異なっているように思われる。

また、各々のパートにおける個々の展示も、断絶のプロットを内包しているといえそうだ。「1. あの日あの時から」で〈震災〉の規模の大きさを示す際には、それがどれほど以前と以後を断絶させてしまったのかが提示される。あるいは「4. 思いがけない『未来』」において示される、想定されていなかった生活は、震災以前の日常生活と比較することで、はじめて示しうる。

このように断絶のプロットは、「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展全体にいきわたっているといえるだろう。

- (13) もちろんこうしたプロットやそれにもとづく物語が、「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展に固有のものであるとはいえないだろう。これらは、おそらくさまざまなメディアでも採用されていると思われる。私たちは、これになじんでいるからこそ、「我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き」展を、このプロットに依拠してスムーズに解読できるともいえるかもしれない。
- (14) ただ、モノは長い年月の間にはいずれ崩壊し消滅する。このため、モノがこうしたはたらきをしているとみなされるのは、それがまだ眼の前に存在しているかぎりにおいてである。このため、しばしば遺物の保全是、こうした物質の消滅との闘いの様相を呈する。他方で、バシヨの場所性それ自体は、物質のように消滅はしない。そこは、そこにあった(タテ)モノが消えてもなお、場所として存在し続ける。それゆえ、モノの物質性よりもバシヨの場所性の方が、より強固に、連続性を支えるとみなされるかもしれない。ただ、場所はそれゆえ、多様な以前と以後が積み重なり沈殿しやすい。ただひとつの場所が、数多くの以前と以後の連続性の証となりうる。このことは、もちろん、それぞれの連続性の記憶でその場所を占有したい者たちが、その場所をめぐる争う可能性を孕むということでもあるだろう。
- (15) 阪神・淡路大震災の経験を経て歴史資料ネットワークが提示した課題とふくしま震災遺産保全プロジェクトとの関連は、別稿(矢田部 2022; 2023)で詳細を論じた。

[文献]

- Assmann, Aleida [1999] 2006 *Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses* (3rd ed.), München, C. H. Beck. (= 安川晴基訳, 2007, 『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』水声社).
- 藤本強, 2000, 『考古学の方法——調査と分析』東京大学出版会.
- ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会, 2017, 『ふくしま震災遺産保全プロジェクト これまでの活動報告』.
- 水嶋英治, 2012, 「博物館資料の概念」大堀哲・水嶋英治編『博物館学I——博物館概論・博物館資料論』学文社, 110-23.
- 奥村弘, 2012, 『大震災と歴史資料保存』吉川弘文館.
- 奥村弘, 2014, 「被災歴史資料と災害資料の保存から歴史研究へ——地域の過去と未来をつなぐために」『歴史学研究』924: 204-213.
- 佐原真, 1995, 「原始古代の考古資料」朝尾直弘・網野善彦・石井進・鹿野政直・早川庄八・安丸良夫編『岩波講座日本通史 別巻3 資料論』岩波書店, 131-74.
- 島村輝, 1991, 「物語 narrative ——閉ざされた物語と開かれた物語」石原千秋・木股知史・島村輝・高橋修・高橋世織『読むための理論——文学・思想・批評』世織書房, 84-7.
- 高橋満, 2015, 「ガレキを歴史に変換する——ふくしま震災遺産保全プロジェクトを考える」『博物館研究』50 (10): 25-28.
- 高橋満, 2016, 「瓦礫を資料に変換する——ふくしま震災遺産保全プロジェクトの活動」『災害・復興と資料』新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野7: 1-7.
- 高橋満, 2019, 「博物館における震災の継承——震災遺産保全のケーススタディ」『博物館研究』54 (7): 19-22.
- 高橋満, 2021a, 「震災遺産と保全プロジェクト」内山大介(編)『震災遺産を考える——次の10年へつなぐために』福島県立博物館, 5-8.
- 高橋満, 2021b, 「ふくしま震災遺産保全プロジェクト(2014年度~2016年度)」内山大介(編)『震災遺産を考える——次の10年へつなぐために』福島県立博物館, 118-122.
- 田中琢, 2002a, 「遺構」田中琢・佐原真他(編)『日本考古学事典』三省堂, 20-1.
- 田中琢, 2002b, 「遺跡」田中琢・佐原真他(編)『日本考古学事典』三省堂, 34-6.
- 田中琢, 2002c, 「遺物」田中琢・佐原真他(編)『日本考古学事典』三省堂, 47-8.
- 東北大学総合学術博物館, 2017, 『東日本大震災遺構3次元クラウドデータアーカイブ構築公開事業』.
- 内山大介, 2019, 「震災・原発被災と日常/非日常の博物館活動——福島県の被災

文化財と『震災遺産』をめぐって』『国立歴史民俗博物館研究報告』214: 103-129.

内山大介, 2021, 「ふくしま震災遺産保全プロジェクト(2017年度～)」内山大介(編)

『震災遺産を考える——次の10年へつなぐために』福島県立博物館, 124-8.

矢田部圭介, 2022, 「歴史資料ネットワークと〔記憶・歴史・表現〕フォーラム——ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展は阪神・淡路大震災からの課題をどう映したか(その1)」『ソシオロジスト』武蔵社会学会, 24: 69-100.

矢田部圭介, 2023, 「〈我曆^が→ガレキ^れ→我歴^き〉展と〈6本の年輪〉展——ふくしま震災遺産保全プロジェクトの震災遺産展は阪神・淡路大震災からの課題をどう映したか(その2)」『ソシオロジスト』武蔵社会学会, 25: 1-38.